

早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書 (Web 公開用)

申請者 (ふりがな)	前田 千晴 (まえだ ちはる)
所属・資格 (※学生は課程・学年を記載。卒業生・修了生は卒業・修了年月も記載)	早稲田大学大学院 人間科学研究科 修士課程 2年
発表年月 または事業開催年月	①2024年9月, ①2024年7-8月
発表学会・大会 または事業名・開催場所	①日本教育心理学会第66回総会 ②日本カウンセリング学会第56回大会
発表者 (※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること)	①前田千晴, 佐々木三紗, 桂川泰典 ②前田千晴, 佐々木三紗, 竹田好香, 桂川泰典
発表題目 (※学会発表の場合のみ記載)	①日本語版 ADHD Stigma Questionnaire (ASQ-J) の作成および妥当性・信頼性の検討 ②ADHD マスキング尺度の作成および信頼性、妥当性の検討
発表の概要と成果 (抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。)	
<p>①スティグマとは、特定の集団に対する否定的な認知、感情、行動を表す概念であり(樫原, 2014)、障害者に対するスティグマが、彼らの社会参加に対する障壁となつていわれている(米倉, 2016)。注意欠如多動症(attention deficit hyperactivity disorder: ADHD)は、不注意、多動性、衝動性などの特性をもつ発達障害である。ADHD 者はその特性により、日常生活場面や対人場面において無理解や衝突が生じやすく、その結果、世間からスティグマの対象として認識されやすい。しかし ADHD に対するスティグマの程度を測る日本語版尺度は存在せず、スティグマが ADHD 者に及ぼす影響および支援の必要性に関する検討は進んでいない。そこで英語版の ADHD Stigma Questionnaire (ASQ) を日本語に翻訳し、質問紙調査を通じて妥当性、信頼性を検討することを目的に研究を行った。その結果、概ね良好な適合度が示され、一次元信頼性の値も十分であった。また相関分析の結果、ASQ-J と抑うつとの間に有意な正の相関、ASQ-J と自尊感情の間に有意な負の相関が示された。</p> <p>学会では本研究の成果について報告し、今後の研究の改善点などについて様々な専門家とディスカッションを行い、今後の研究活動における参考となった。</p> <p>抄録公開 URL : https://www.edupsysh.jp/wp-content/uploads/2024/09/5aaa37d54c1b710eca8a7c728cce0111.pdf</p>	
<p>②注意欠如多動症(attention deficit hyperactivity disorder: ADHD)は、不注意、多動性、衝動性などの特性をもつ障害である(APA, 2013)。彼らはその特性から、学校場面や人間関係において困難な経験をすることが多く、そのような経験をした者の多くが、周囲に対して ADHD 特性を隠すようになることが明らかとなっている。(Ginapp et al., 2023)このような行動は「マスキング」と呼ばれている。ADHD マスキングは、より円滑に日常生活を送る力や ADHD 特性により生じる問題の解決につながるといったプラスの面と、心理的負担や診断の見逃し、遅れにつながるといったマイナスの面の両側面があることが明らかとなっている(前田他, 2023)。しかし ADHD マスキングを測定する尺度は国内外ともに一切開発されておらず、ADHD マスキングにより生じる困難を発見し、支援につなげることは非常に難しい。以上を踏まえて、ADHD マスキングの程度を測定する尺度を開発し、信頼性およ</p>	

び妥当性を検討することを目的に研究を行った。その結果、2 因子構造が支持され、良好な適合度が示された。一次元信頼性の値も十分であった。また相関分析の結果、マスキングと抑うつ、不安の間に有意な正の相関が示された。

学会では本研究の成果について報告し、今後の研究の改善点などについて様々な専門家とディスカッションを行い、今後の研究活動における参考となった。

※無断転載禁止